

この世の息 歌は遺った

歌人で細胞生物学者の永田和宏(64)は、短歌をつくり始めて40年以上になる。学術論文と同じように、パソコンで歌を横書きしている。

なんとなく恥ずかしくて、人前で朗読することはなかったが、ここ1年余り、講演会で作品を読み上げるようになった。

「耳で聞いて分かってもらえるか心配しましたが、短歌に縁がない人も感動してくれているんです」

声に出して呼びかける——それが和歌の最初の形だったはずだ。文字で読むことに慣れすぎたが、人間は、声の力で気持ちが届くように出来ているのではないか。

そう思うようになったのは、一つ年上でやはり歌人の妻河野裕子(ゆこ)が亡くなってからだ。最後の数日、河野は声で歌を紡いだ。

ともに京都の大学生だった1967年、歌会で2人は出会った。河野の代表作。

たとへば君 ガサツと落葉
すくふやうに私をさらつて行
つてはくれぬか

5年後に結婚。書いたばかりの歌を見せ合い、○、△で評価した。そろって新聞の歌壇や歌会始の選者になっても、それは続いた。

出産、炊事、庭の草花。日常のあれもこれも歌になり、「歌壇の磯野家」と言われる。サザエさんのように、家

族の事情が筒抜けという意味らしい。長男淳(38)、長女紅(36)も歌人になった。

2000年、河野に乳がんが見つかる。病気を詠むことに永田は反対した。がんの人の歌としか見られなくなるのではないか。「やっぱり歌う」と河野。隠せば言葉が濁る、と言った。

明日になれば切られてしまふこの胸を覚えておかむ湯にうつ伏せり

08年、肝臓に転移。河野は死を意識して歌を詠む。泣いてるひまはあらずも

一首でも書き得るかぎりは書き写しゆく
永田も、その時を詠む。歌は遺り歌に私は泣くなら

ういつか来る日のいつかを怖る
河野はすつと、食卓に原稿用紙を広げて、2Bの鉛筆で

歌を書いてきた。病床では手近の紙をつかんだ。封筒や薬袋、ティッシュの箱にまで、乱れた文字で書き付けた。



永田淳さん(右)、紅さん

一昨年8月、鉛筆が握れなくなる。前置きもなく、ぼつりぼつり繰り出す言葉が五・七・五になっていた。家族3人が交代で書きとめる。

八月に私は死ぬのか朝夕のわかちもわかぬ蟬(せみ)の
声降る
庭の桜の木でアブラゼミが
鳴き続けていた。

口述筆記を始めて4日目。手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が
永田が書きとめた歌が最後になる。翌日の8月12日。

「ゆうこ」
永田が声をかけると、河野は息をひとつ吸って、亡くなった。64歳だった。

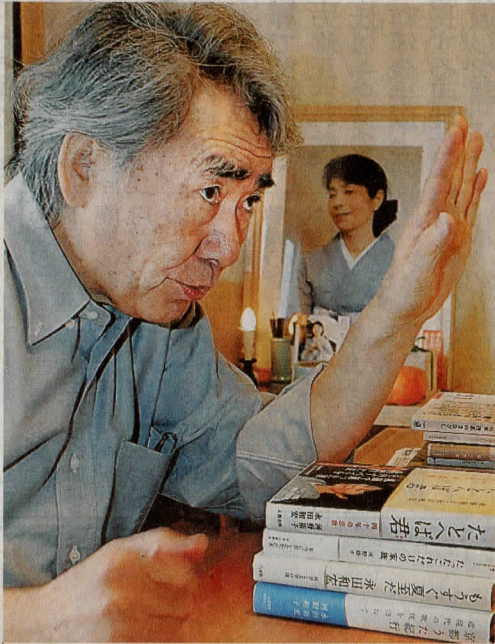
永田の挽歌。
君に届きし最後の声となり
しことこのち長くわれを救
はむ

「父が母を呼び捨てるのを聞いたのは初めてでした」
紅は言う。「あなた」か

「裕子さん」と呼んでいた。
昨年6月、河野の最終歌集が出来た。「蟬声」。淳が名付けた。

誰にも、忘れられない声がある。声は絆、声はぬくもり、声は力、と人は言う。河野裕子は、こう歌っている。
こゑのみは身体を離れて往
来せりこゑとふ身体の一部を
愛す

このシリーズは文を湯瀬里
佐、写真を中井征勝が担当
しました。文中敬称略



永田和宏さん。河野裕子さんの遺影と

■次回からは「孫文がいた」です。ご感想は上記アドレスへ。